「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助
～戊辰・箱館戦争後まで～

高　橋　秀　悦*

1　はじめに

「今日「富田鐵之助」という名前を知っている人は，殆んどないと思われる。もし知っている人があるとすれば，少数の日本経済の専門家，仙台における郷土史家，そして歴史に興味をもった一部の日本銀行員くらいのものに過ぎないであろう。」

吉野俊彦『忘れられた元日銀總裁　―富田鐵之助傳―』は，この書き出しから始まる。吉野俊彦（1915－2005年）は，日本銀行の内国調査課長，調査局長，理事の経歴をもつ人であり，経済・金融分析で活躍する現代の「日銀エコノミストの草分け」でもある。日銀エコノミストとしての通常の経済分析に関する論文や1956年の『我が國の金融制度と金融政策』等の定評ある研究書の執筆はもとより，驚かされるのは，「軍医と小説家」という二足の草鞋を履いた森鴎外を私淑して，鴎外研究を始め，その専門家としても周知されていたことである。

吉野の1974年発刊のこの著書は，月刊「金融ジャーナル」の第6巻第1号（1965年1月）から第9巻第10号（1968年10月）までの4年間をかけて掲載されたものに増補改訂したものである。この著書の中で，吉野は，富田鐵之助の伝記執筆を志してから30年以上の歳月が経過したと述べているので，吉野が日本銀行に入行した直後からということになる（p.473）。吉野が，この研究を始めた契機として，「日本銀行が今日まで歩んできた道は，日本経済の潮の流れを反映したもので，歴代の日本銀行の指導者達の業績を跡づけてみても，この大きな流れの外にはみでることはできないが，この流れの幅は実はそれほど狭いものではなく，指導者達のそれぞれの血統，出身地，教養，経歴，性格等によって，この流れに対処する日本銀行の態度は異なっている（pp.3-4）。」として，この趣旨から歴代の日本銀行総裁の伝記を研究していると述べている。2013年，日本銀行では第30代総裁白川方明から第31代総裁黒田東彦への交替が行われた。「日本経済に対する現状認識やそれに伴って実施されるべき金融政策」についての2人の見解の違いが極めて大きく，この交代劇は世の注目の的となった。中央銀行の独立性が叫ばれ，日銀の金融政策決定会合によって金融政策が決定されると言われながらも，日本銀行の首脳人事には，国権の最高機関としての

* 本稿を作成するにあたり，大童家文書の閲覧を許可いただいた仙台市博物館，大童敬郎氏（元学校法人東北学院理事･法人事務局長）及び水野沙織氏（仙台市博物館学芸員）に記して感謝申し上げます。また，大童家文書の閲覧・解読に関して様々なご協力をいただいた仁昌寺正一教授（東北学院大学経済学部）・雲然祥子氏（東北学院大学大学院経済学研究科博士後期課程），大童家文書（整理番号313）の解読・校閲をいただいた七海雅人教授（東北学院大学文学部），脚注に関して幾つかのコメントをいただいたWilson Alley 教授（東北学院大学経済学部）に対して厚く感謝申し上げます。なお，当然のことながら，本稿に含まれる誤りは，すべて筆者の責任に帰する。

国会の同意を得て内閣が任命することが求められている。この意味で，日本銀行総裁のポストは政治的任命ポストであり，日銀総裁の指導によって，日本経済の潮の流れに対処する日本銀行の態度が変わる。この点は，現在でも，吉野（1974）の認識と大きな違いはない。

これに加えて，明治15（1882）年に富田鐵之助（大蔵大書記官）が吉原重俊（大蔵少輔）等とともに，「日本銀行創立委員」に任じられ日本銀行設立の準備にあたったこと，日本銀行初代総裁に吉原が，初代副総裁（吉原が病気がちなために事実上の総裁）に富田が任じられたこと，明治21（1888）年の吉原の病死後には，富田が第2代総裁に昇格していること等を考え合わせれば，日本銀行の礎石を築き，その方向性を定めたという点からも，富田鐵之助の生き方や対処の仕方を研究することは重要である。

「富田鐵之助研究」は，30年の年月を要したこの吉野の研究に尽きるが，吉野（1974）の研究を部分的に補完するものとしては，武田（1972）を挙げることができよう。武田（1972）は，富田鐵之助が設立に関与した「東華学校」に関する研究であり，吉野が，「本章は本書公刊にあたり新たに付加ものである。「金融ジャーナル」に富田鐵之助傳を掲載中，・・・・・昭和47年3月武田泰氏から当時の日本銀行仙台支店長吉田満君を通じて同氏執筆に係る「富田鉄之助素描」と題する論文の載せられた『松の実』第21号（宮城県立第二女子高等学校）の寄贈をうけ・・・富田鐵之助傳の重要な部分を看過する結果となることに気が付いた。・・・・・ここに同氏に対し改めて感謝の意を表する次第である（p.270）。」と述べている通りである。武田泰は，当時，第二女子高等学校教諭として，その沿革を調査する過程で富田鐵之助が果たした役割の重要性を認識し，これを「富田鉄之助素描」としてまとめ，顧問をしていた生徒会の機関誌『松の実』に掲載したものであった。第二女子高等学校（現在の「宮城県仙台二華中学校・高等学校」）の前身の「東華高等女学校」が，富田鐵之助が設立に関与した「宮城英学校（校長：新島襄，明治19年設立，明治20年に東華学校と改称，明治25年廃校）」とほぼ同じ場所に設置されたことから，両者の連続性・不連続性を探求したものである。現在，宮城県図書館「みやぎ資料室」の開架書架には，大著の『忘れられた元日銀總裁　―富田鐵之助傳―』と（ハードカバーで）製本された「富田鐵之助素描」とが，隣り合わせに配架されている。なお，吉野は，あまりにも当然のこととしてコメントを付していないが，引用文の中の「日本銀行仙台支店長吉田満君」とは，ほとんど1日で書き上げた文語体の名著『戦艦大和ノ最期』の著者の吉田（1952）である。

吉野（1974）は，480ページにも及ぶ大著であるが，このコア部分を的確，かつコンパクトに整理したものとしては，田中（1970）と宮城（2005）を挙げることができる。田中（1970）は，まさしく「紹介」論文である。宮城（2005）は[1)]，これに加えて，明治31（1898）年に「第七十七国立銀行」が国立銀行としての営業満期を迎え，私立銀行へ転換する際に果たした富田鐵之助の役割の重要性についていくつかの新しい知見を付加している。

さらに，富田鐵之助は，一橋大学とは商法講習所（一橋大学の前身となる機関の1つ）設立に

1）　この論文の著者は，日本銀行国庫局長・文書局長を経て，七十七銀行（仙台市）の頭取・会長を歴任した「勝股泰行」であり，「宮城建人」はそのペンネームである。

おいて，同志社とは「同志社の分校たる」仙台の英学校（宮城英学校･東華学校）設立において，重要な役割と果たしていることに加え，福澤諭吉や「演説館」設計図収集を通して慶應義塾とも関わりがある。一橋大学，同志社，慶應義塾においては，富田鐵之助関連の資料整備が進んでいるが，あまりにも多数に上るので，ここでは資料・論文等の紹介を省く。

また，富田鐵之助は，日本銀行総裁を辞職した2年後の明治24年には，東京府知事に任ぜられ，当時，神奈川県に属していた「三多摩（南多摩郡・北多摩郡・西多摩郡）」を東京府に併合するという極めて困難な事業を遂行している。東京府からすれば，「三多摩」は水源池確保のために必要であったが，当然，神奈川県は反対の立場であった。ともかくも，この併合によって，東京都（府）と隣接県との境界域が，ほぼ現在のように決定されることになったのであり，これに関係する研究も多数に上る。

「富田鐵之助研究」において，やや異彩なものとしては，1870年代にニューヨーク副領事として日本の生糸の対米輸出に寄与したとする研究（大野（2010））や，東京府知事辞任後に富士紡績の設立に関わる研究（筒井（2010））等がある。

しかしながら，上のいずれも，富田鐵之助と彼が関係する・大学・機関・組織についての部分に限定された研究にとどまり，富田鐵之助の全体像を捉える研究には至っておらず，吉野（1974）は，40年を経過した今でも，その輝きを失っていない。本稿は，その後の新しい資料によって，吉野の研究を補足する目的をもっているが，富田鐵之助の活動は，上で述べたように極めて広範囲に渡っていることから，このすべてを追い求めることは，時間制約等のために不可能である。

吉野（1974）では，富田に影響を及ぼした人物として，「勝海舟，福澤諭吉，森有禮，新島襄」の4名を挙げ，特に「勝海舟」との関係については「富田日記」に基づき「美わしい師弟関係」と捉えている。吉野（1974）の発表の後に，「海舟日記」が（勁草書房版，講談社版，江戸東京博物館版のように）新たな形で整理・公刊されており，現在では，これらが容易に利用可能な状況になっている。本稿では，「海舟日記」に基づいて，吉野（1974）の言う「美わしい師弟関係」を「海舟」の視点から再確認するとことを目的としている。

本稿は，冒頭に引用した区分からすれば，次節の冒頭に述べる事柄を研究の直接の動機としており，極めて「仙台における郷土史家」の視点に立つ。本稿の目的は，上で述べた通りであるが，必要に応じて，この視点からの若干の展開も行うので，「歴史に興味をもった一部の」方々に関心をもっていただければ幸いである。

２　問題の発端

この『東北学院大学論集　―経済学―』の退職記念号に記載された先生方，特に本学に赴任以来絶えずご指導いただいた山崎和郎教授と歴史の魅力を教えていただいた原征明教授に対しては，論文を執筆することで感謝の念を表したい思いがあった。もともとは，『県民経済計算』を用いての域際収支の研究等を構想していたが（高橋（1992），（1994），原・高橋（2012）），頭休めに読んだ郷土史『黒川郡誌（復刻版）』の第12章で立ち止まることとなった。

このオリジナル版は，『宮城懸黒川郡誌』として，大正13（1924）年に黒川郡教育會によって発行されたものであるが，その奥付（復刻版の「奥付」挿入文書）には，印刷所や印刷人として「仙臺市東八番丁184　　労働會印刷所」「佐久間民治」とある。この印刷所は，もともとは「東北学院　労働會印刷所」であり，大正9年に印刷所主任の佐久間民治に売却されたものである（『東北学院百史』 p.368）。

この『黒川郡誌』の第12章は，「金石文」の章であり，郡内の鐘名，記念碑，墓誌等が特段の説明もなく，鐘や碑に刻まれた事柄を採録した章である。関心をもった箇所は，次の採録である（p.350）。

但木成行招魂碑誌
　　吉田保福寺境内
嗚呼此舊仙臺藩老但木君招魂碑也戊辰之役君以宿老宰藩政及事平殉難于
東京舊藩邸實明治二年五月十九日也距生文政元年五月二十日享年五十有
二葬于高輪東禪寺先塋之側君諱成行幼名房五郎稱主馬後改土佐號七峯樵
夫今茲二十八年正當二十七回忌辰君孫乙橘與其舊臣等謀建碑於舊采邑吉岡
保福寺以招其魂海舟勝先生與君有舊則介余請其題字鐫諸碑面
明治二十八年五月十九日　　内弟　富田鐵之助誌

「但木成行招魂之碑」は[2]，仙台藩の藩務を一身に司り，戊辰戦争の仙台藩側の責任を問われ斬死した家老「但木土佐（成行）」の二十七回忌の招魂之碑である。碑面の題字「但木成行招魂之碑」は，富田鐵之助の依頼により勝海舟が揮毫し，これを刻したものである[3]。

これを読んだことが，今回、富田鐵之助と勝海舟の間の「美わしい師弟関係」を確認作業へと駆り立てる強い動機となったのである。

2）『黒川郡誌』では，「但木成行招魂碑」となっているが，正しくは「但木成行招魂之碑」である。本田（2003）には，仙台市葛岡霊園内の愚鈍院墓地の「但木成行招魂碑」の写真が掲載されていた（p.401）。平成25年12月に実査したところ，裏面は風化が激しく，碑建立の経緯や日付も読み取れない。以下では，「但木成行招魂之碑」（宮城県黒川郡大和町　保福寺境内）について論考する。

3）『勝海舟全集　22　秘録と随想』（講談社版）によると，「海舟は，遠方からの碑文の依頼にも，割合気軽に応じて（p.824）」いる。この全集には「序跋・碑銘集」が所収され，その中の「碑銘・纂額（22巻のpp.554-566や別巻のpp.831-842）」の項も設けられているが，「但木成行招魂之碑」は所収されてはいない。なお，この項（22巻のpp.565）には

「　新島襄之墓
　　明治廿三年一月廿三日
　　友人勝安房悼新島氏之永眠
　　追想之餘書之　　」

が勝海舟筆として所収されている（ただし，現在の新島襄の墓碑（京都市左京区鹿ケ谷若王子山町「同志社共同墓地」に所在）は，風化が進んだために，1987年1月16日に再建されたものであり，碑銘は元の墓碑から写し刻んだものとされている。）。これを海舟日記の明治23年12月16 日条で確認すると，

「　新島襄未亡人，墓表認め十円遣わす。」

と記載がある。

さて本論に入る前に,「但木土佐」[4] と「富田鐵之助」が同時に登場する場面として,福澤諭吉の『福翁自傳』の一節を紹介する[5]。すなわち,

「およそ当時仙台の書生で大童の家の飯を食わない者はなかろう。今の富田鉄之助をはじめ一人として世話にならない者はない。ところが幕末の時勢段々切迫して,王政維新の際に仙台は佐幕論に加担して忽ち失敗して,その謀主は但木土佐と云う家老であると定まって,其の人は腹を切ってしまったその後で,・・・(岩波文庫版『新訂　福翁自伝』,p.235)」

である。

『福翁自傳』の「雑記」の「癇癪」の条の主人公は,福澤諭吉自身と仙台藩江戸留守居役の「大童信太夫」であるが[6],幕末の福澤諭吉と仙台藩との関係は深い。『福澤諭吉書簡集　第1巻』や『福

4）　仙台藩は,俸禄給付制ではなく,「地方（じかた）知行制」をとっていた。家臣の多くに知行地と呼ばれる土を給付し,年貢を取り立てる権利を認めていた。特に,藩の「一門･一家･準一家･一族･宿老･着座」等の重臣は,藩務を務めるために仙台城下に屋敷を与えられるとともに,仙台藩内に知行地（城･要害拝領,所拝領,在所拝領等）を与えられていた。但木家（1500石）は,富田鐵之助の撰文にある「吉岡」(現在の宮城県黒川郡大和町吉岡）を「所拝領」としていた。天明8（1788）年に幕府の奥羽･松前巡見使に随行したときの古川古松軒の紀行文である『東遊雑記』の9月28日条に「二十八日中新田,御発駕,四里吉岡,三里松島止宿なり。吉岡在町にて,仙台藩の家老何某の在所なり。仙台侯の家士千石以上は土着して在宅せることにて,たとえその人在所の居住ならぬ身にても在所持ちにて・・・」と記載されている通りである。ここで,主街道（奥州街道）に沿った位置関係を確認すると,奥道中歌に「国分（仙台）の町よりここへ七北田よ　富谷茶呑んで味は吉岡」とあるように仙台から北へ3つ目の宿場（城下）である。近年では,磯田（2012）によって『無私の日本人』として評価された「穀田屋十三郎」等が明和年間（1770年代）に救済事業を起こした所でもある。

なお,『福翁自傳』は(また,「海舟日記」も),但木土佐を家老としているが,仙台藩での正式名称は「奉行」である。これは,まさしく他藩の家老職に相当する職である。「奉行職」は,「宿老」,「着座」格以上から選ばれる職務であり,但木家は,「宿老」格,富田家は,「着座」格の家柄である。富田家の知行地は小野（2000石）であった。この小野は,現在の宮城県東松島市小野であり,小野の「御館公園」の案内板や「小野館跡」の石柱には,その簡単な説明書がある。本田（2003）は,城下絵図から屋敷は鳴瀬町立第一中学校敷地（現在の東松島市立鳴瀬未来中学校）敷地としている。鐵之助の父「實保」も仙台藩奉行を務めており,その四男として,天保6（1835）年10月16日に仙台良覚院丁に生まれている（『仙臺先哲偉人錄』,p.385)。

5）　佐志（2006）は,『福翁自傳』の初版本から（定本の）『福澤諭吉全集　第7巻』までの版の差異についての詳細な研究である。本来的は,『福澤諭吉全集　第7巻』を引用すべきであるが,この本稿では,さまざまな面で利便性が高い岩波文庫版の『新訂　福翁自伝』から引用する。

6）　「大童信太夫」の呼び方は,「オオワラ」である。『福澤手帖』では,大童信太夫没後100年の特集論文（105号と106号,2000年）が組まれる等,福澤諭吉と大童信太夫の関係は深い。105号には,明治22年5月の「時事新報」の記事が再録されており,「おほわらしんだいふ」の（旧かな遣いの）ルビが振られている。

河北（2006）は,「福翁自傳」の「注釈編」の中で,日本歴史学会（編）の『明治維新人名辞典』(吉川弘文館）等が採用した「オオワラべ」の呼び方を棄却し,『宮城県百科事典』(河北新報社）に基づき,正しく「オオワラ」を採用している。また,『高橋是清自傳』の漢字にはすべて旧かな遣いのルビが振られており,大童信太夫には,当然のこととして,「おほわらしんだいふ（p.14)」のルビを振り,Smethurst(2007)も,”Ōwara Shindayū(p.17)“と記している。ところが,大島(1999)の『高橋是清』(中公新書）では,こともあろうに「大童信太夫」を「ダイドウ」としているのは,どうにもいただけない。

現在,宮城県黒川郡には2か所（富谷町大童と大衡村大衡字大童）の「大童」の地名が残されている。呼び方はともに「オオワラ」である。『宮城県姓氏家系大辞典』(角川書店）には,「大童信太夫」の人物説明の項と富谷町大童由来の「大童家系」の記載がある。また,大衡村大衡の大童には,仙台･中新田間を結ぶ仙台（軽便）鉄道の「大童」駅が設置（昭和4年～昭和25年）されていたことがある。

澤諭吉全集　第17巻』に所収の「福澤から大童宛ての10数通の書状」が示すように，翻訳した横浜の英字新聞の記事の買い取りや英字新聞等の翻訳の依頼，（渡米の際の）鉄砲買い入れや洋書購入の依頼[7]，宇和島藩主伊達宗城の二男・宗敦を仙台藩主の養子とするための実務レベルでの斡旋・人物調査等である。

また，福澤から大童宛の書状（慶応2年12月23日付）には，『西洋事情』を「仙台の殿様と‘大童’に謹呈する旨や，金3分で何冊でも配布する旨」が，また，12月26日付の書状の追伸には，「『西洋事情』の2巻・3巻を同封するので，これを‘但木土佐殿’へ差し上げてほしい旨」も記されている（『福澤諭吉書簡集　第1巻』及び『福澤諭吉全集　第17巻』に所収）。

福澤と富田の関係は，福澤が，明治7年の富田鐵之助と妻「縫」との「婚姻契約」に関して行礼人（証人は，森有禮）を務める等，「福澤と富田は終生親しい友人として交際を続けている（河北（2006），p.283）。」のである。

本稿のテーマに従って，富田鐵之助と仙台藩江戸留守居役（仙台藩での正式名称は「公議使」）大童信太夫の関係を見ると，大童は，勝海舟の要請に応じて，海舟の子息の「小鹿（当時14歳）」の慶応3年の渡米に際し，富田鐵之助（当時32歳）を同行させ，さらに，通弁修業・富田の従者という名目で，高橋是清（後の日本銀行総裁・大蔵大臣・内閣総理大臣）と鈴木知雄（後の旧制第一高等学校教授・日本銀行出納局長）を送り出していたのである。

3　海舟日記

勝海舟の「日記」は，文久2（1861）年閏8月17日の「於御前，御軍艦奉行並被　迎付」に始まり，明治31（1898）年12月26日の「叙爵仰せ付けられる。且，廿八日，御倍 [陪] 食仰せ付けられる。」までのほぼ40年間にわたる克明な記録である。この日記は，幕末の政治史の貴重な資料であることはよく知られているが，江戸東京博物館版『海舟日記（一）』の「刊行によせて」にあるように，「従来の幕末史の枠を超えて，幕府・諸藩の領域をクロスオーバーして人物や情報の交換が広がっていることを教えてくれる。」のである。本稿の目的からすれば，幕末も当然のことながら，海舟をとりまく明治という時代の政治状況や人物についての情報や海舟の個人的人間関係についての情報の宝庫でもある。

「海舟日記」が，一般に公刊されたのは，明治40（1908）年の梶梅太郎（海舟三男）・巖本善治編のものが最初であり，この後，『海舟全集　第9巻』（改造社版（昭和3年）に所収されることになる。その後40年を経て，勁草書房版（昭和47～48年），講談社版（昭和51年）が出版され，さらに平成の江戸東京博物館版（平成14～23年）に至っている。こられの出版にともなって，専門家の間では何をもって「海舟日記」かの根本的な議論があったが，この論文では，講談社版と江戸東京博物館版での解釈に従い，現在，江戸東京博物館が所有している「日記」を「海舟日

7）『仙臺戊辰史』（p.297）には，福澤から大童宛の「計算書」が掲載されている。これに『福澤諭吉全集』の編集者が疑問点をもちながらも，『福澤諭吉全集　第17巻』，pp.38-39に再掲されていた。その後。逸見（1985）による精査が行われた結果，『仙臺戊辰史』の誤読等が判明し，疑問点も正されている（『福澤諭吉書簡集　第1巻』，p.88）。

記」と考えることにする。戊辰戦争に関しては，日常的に付けていた日記（慶應4年の日記）をベースに公開を目的に増補したものと考えられる「慶応四年戊辰日記」がある。この日記は，講談社版の『勝海舟全集　幕末日記』に収められているが，勁草書房版の『勝海舟全集　18～21』に収められた「海舟日記　Ⅰ～Ⅳ」は，上の解釈からすると，通常の「海舟日記」,「慶応四年戊辰日記」，及び改造社版で使われた「海舟日記抄」とが整理されないまま所収されているという。

本稿では，上の解釈を踏まえ，文久2（1861）年閏8月から明治4（1869）年12月までは，東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『勝海舟関係資料　海舟日記　（一）～（五)』に基本的に依拠し，明治5（1870）年1月から明治31（1898）年12月までは，勁草書房版の「海舟日記　Ⅱ～Ⅳ」に依拠する。また,「慶応四年戊辰日記」については，講談社版の「幕末日記」に依拠することとする。本稿は,「戊辰・箱館戦争後まで」を考察の対象としているので，基本的には，江戸東京博物館版に基づいて論考する。

４　氷解塾

富田鐵之助と勝海舟の関係は，文久3（1863）年7月21日，富田が海舟の「氷解塾」に入塾したことに始まる（『仙臺先哲偉人錄』，p.386)。

「海舟年譜」は，明治38年に海舟の7回忌にあたり，富田が編纂したものである（『海舟全集第10巻』(改造社版，昭和4年）に所収)。その諸言には,

「氷解塾ニ起臥シ　海舟先生ノ訓戒ニ接シタルハ四十餘年前ノ昔トナリヌ

又同學ノ諸士過般幽明其堺ヲ異ニス　就中坂本龍馬ノ毒手ニ斃レ　・・・(p.511)」

と記載されている。

当時の氷解塾の塾長は，佐藤与之助（もともとは庄内藩士ながら，安政6（1859）年，軍艦操練所蘭書翻訳方に出役し,元治元（1864）年に幕臣（軍艦組),慶應2（1866）年,大坂鉄砲奉行並）であり，塾生の総数は，およそ90名とされている。ちなみに，福沢諭吉は，安政4（1857）年に大坂の緒方塾（適塾）の塾長になっているが，このときの塾生数は80名とされていることから，ほぼ同規模の塾と推定される（河北（2006)，p.46)。

富田が入塾した頃の「氷解塾」は,

［文久3（1863）年1月9日］

「御同人＜因州侯のこと＞之臣数輩我門に入ることを被談

昨日土州之者数輩我門に入る，龍馬子＜坂本龍馬＞と形勢之事を密議し，其志を助く」

［文久3（1863）年10月16日］

「夜に入り，春嶽公より書を賜ハる，門生五人を入塾せしめんことを被　仰越」

のように,海舟が「軍艦奉行並」に任じられたことに伴い,「門下生」が急増し始めた時期でもある。富田も，まさに，この時期に入塾したのである。

なお，以下では，江戸東京博物館版からの引用において，本文記載の注記事項は（　　）に，脚注の記載事項は［　］に，筆者の注記は＜　　＞に記載する（ただし，読みやすいように，改

行するとともに，脚注の記載事項［　］については，適宜，省略している）。また，日記の日付は，「和暦」によるものであり，西暦の日付とは一致しない。元号を西暦に直す際には，本来，この点も考慮しなければならないが，本稿では，この点の修正を行っていないので，（特に年末年始の）西暦年号については，注意が必要である。

その反動もあってか，その2年後には，

［元治元（1864）年8月19日］

「塾中之掟を申渡す，近来紀伊家之者放蕩甚敷，
殊に押貸等の所行あり，皆放逐，又越前家之者放蕩
絶言語，たへて士之行なし」

［8月25日］

「塾中之書生放蕩，戒之」

［9月19日］

「此頃我塾中之者，姓名・出所御内糺ありと云」

という状態になっているが，それにもかかわらず，海舟は，明石藩や久留米藩からも，多くの塾生を受け入れているのである（元治元（1864）年9月3日条と9月13日条）。

前述のように，富田は，文久3（1863）年7月21日に海舟の「氷解塾」に入塾したとされているが，この時期に富田に関する記載は，全く見当たらない。最も多く記載がある個人名は「坂本龍馬」であり，文久2（1862）年12月29日条の「同時坂下（本）龍馬来る，京師之事を聞く」から，元治元（1864）年8月23日条の「坂本生従京地帰る，聞く，当節征長之説に繞み，薩ニも無策略」まで十数回に及ぶ。富田の「海舟年譜」の諸言にも，「就中坂本龍馬ノ毒手ニ斃レ」とあるように，「坂本龍馬」の名を明記しており，この時期においては，まさに「坂本龍馬」が海舟の門弟の中で第一の門人であったのである。しかしながら，これ以後の「坂本龍馬」についての記述は，慶應2年2月1日条と慶應3年12月6日条の2回にとどまる。前者は，「薩長同盟の成立と坂本龍馬」について，後者は，「近日雑文」という記載で始まる「坂本龍馬の刺殺の報」である。

「海舟日記」の中に，富田が後にもっとも関係する人物の記載があるので，ここで紹介しておく。それは，薩長同盟が成立した日（『勝海舟全集　別巻』（講談社版），p.1009）と同じ日の条，すなわち，

［慶應2（1866）年1月21日］

「薩藩国元江出立之由にて退塾四人，種ヶ島・湯地・吉原・桐野四人」

である。この記載は，元治2年2月10日条と13日条と関連している。すなわち，

［元治2（1865）年2月10日］「薩藩四人入塾を乞ふ」

［2月13日］　　「薩藩四人入塾」

である。この4人のうち，種ヶ島啓輔，湯地定基，吉原重俊の3人は，薩摩に帰国後に，薩摩藩第2次留学生としてアメリカに留学する。いずれも，後に米国で「新島襄」と関わりをもつ人たちである。

このうち，吉原は，富田とともに，維新後に似たようなコースを歩むことになる。まず，薩摩藩第1次留学生を経験した森有禮（アメリカ公使：当時の官名は，米国在勤少辨務使）の下で，明治5年，外務省書記官（吉原はワシントン駐在，富田はニューヨーク領事心得や副領事）を務める。帰国後は，ともに外務省，大蔵省に勤務する経歴をもち，明治15（1882）年6月28日には，大蔵少輔・吉原重俊と大蔵大書記官・富田鐵之助が，ともに「日本銀行創立委員」に任じられる（『日本銀行百年史』，p.217）。また，日本銀行設立の同年10月6日には，吉原が日本銀行初代総裁に，富田が初代副総裁（吉原が病気がちなために事実上の総裁）に任じられている（『日本銀行百年史』，p.228）。さらに，明治21（1888）年に吉原が病死すると，富田が第2代総裁に昇格しているのである。

吉野（1974）は，富田を研究し尽くしたと言っても過言ではない程の研究書ではあるが，この書には，富田と吉原の最初の出会いについての記載はみられない。雑誌「太陽」第20巻第3号に掲載された竜城外史の「日本銀行論」の中の「慶應の末年に渡米し，吉原氏とは在米當時よりの友人であった。」を引用しており，二人がこの時期に知り合いであった可能性までは思い至っていない。しかしながら，この二人は1年程，同時に氷解塾（富田が3年ほど先に入塾）にいた可能性があり，面識もあった可能性があるのである。

海舟は，元治元（1864）年5月，軍艦奉行に昇進したが，薩藩四人の入塾直前の同年11月に免職となり，1年半後の慶應2（1866）年5月に軍艦奉行に再任されるまでの間，「閉居門ヲ出デス」の状態にあった。「海舟日記」からは，意見・見解・覚書等の記載は消え，1日に1行のみを備忘録的に記載する日も多く見られるようになる。4人の薩摩藩士が氷解塾で学んだのは，まさしくこの時期であった。

5　富田鐵之助の渡米

「海舟日記」に富田の名が初めて記載されるのは，慶應2（1866）年9月19日条，すなわち，

「仙台藩両人来る，当節召に因て世子上京，内々事情聞合之為其先に下たれりと云，

富田之手紙持参，当年は奥筋米作大抵三分，甚不作也と聞く」

である（「仙台藩両人来る」の右脇には，「朽木五左衛門・玉蟲左太夫」の書き込みがある）。これ以後も，富田に関する記載は，慶應4（1868）年1月まで全く見られないが，この間，富田にとっては，生涯を左右し，また，海舟との絆を深くする一大事が起こっていた。

「慶応3年3月4日，在京の處江戸表に御用有之早速罷下る様御奉行但木土佐より申し渡され，同6日京都出立同11日江戸に着く。・・・・3月13日，江戸藩邸に於いて若老より左の令達を受けた。

御軍艦奉行勝安芳守殿御子息此度為留學一兩年

見詰を以て米利堅へ御越被成候御手前御借受・・・（『仙臺先哲偉人錄』，p.387）」

である。これは，海舟の長男の小鹿（当時，14歳）が1年ほどアメリカ留学をする事に伴い，富田を借り受けたい旨の話があるので，仙台藩としても，富田に学資として年間に千両を給付することを決めた旨の令達であった。

ところが，「海舟日記」には，この間の事情も全く記載されていない。留学については，ほと

んどが小鹿に関するものである。まず，

［慶應2（1866）年9月26日］

「江戸にて英国江伝習十三・四人程命せられたり，小拙か悴兼て願置きしか，

其試にも御達無之，況哉御選抜之事誰人申者なしと云・・・

○四郎［海舟の次男］危篤之事江戸より申来る」

である。8月に幕府留学生の選抜が行われて，イギリスへ13・14人派遣されることが決まった。海舟も，長男の小鹿と次男の四郎の留学を希望していたが，選から漏れたところに，四郎危篤の知らせが入ったのである。このため，海舟は，私費での小鹿の留学を幕府に願い出る。すなわち，

［慶應2（1866）年10月24日］

「小鹿米利堅江留学を願ふ，尤自分入用也」

である。

この願いは，翌年に認められている。江戸東京博物館版『海舟日記（二)』の最後部分と『海舟日記（三)』の最初部分では，日付の重複記載が見受けられるが，記載内容は，別のものが多い。慶應3（1867）年2月2日条と2月3日条も食い違いが見られるが，ここでは，『海舟日記（二)』から

［慶應3（1867）年2月3日］

「小鹿米利堅江留学願相済

近日長州之事，

大行天皇［孝明天皇］崩御ニ於而，御解兵之議被　迎出」

［慶應3（1867）年2月10日］

「庄内松平権十郎来る，高木三郎小鹿同行之事談し承服，

決心して此挙に倍（陪）従を乞ふ」

の2つを採録しておく。すなわち，小鹿の留学が認められたので，小鹿の同行者として，まず「氷解塾」塾生の「高木三郎（庄内藩士)」を決めたのである。渡米後は，富田と高木は，ともに行動することになるが，前述のように，富田を同行者に決定した経緯については，「海舟日記」には記載がない。

この後，海舟は，小鹿の留学の準備に入る。すなわち，

［慶應3（1867）年2月22日］「小鹿横浜語学江入塾相願，但米行前両三ヶ月也」

［3月28日］「小鹿米利堅江留学之節，御印章＜パスポート＞は其先願置，・・・」

［4月3日］「御印章被下候ニ付，外国奉行江可談旨願書江御下取（ママ）御渡し」

［4月6日］「御印章石野筑前［外国奉行］より受取」

［4月11日］「米之工司（公使）江小鹿留学之事頼ミ」

［4月14日］「米利堅工士（公使）より，留学之儀ニ付書翰差越す」

［5月14日］「太田より，亜米利人ワーシ悴留学之世話御心得候間，掛念不可致旨申越」

［7月11日］「小鹿美里堅国（アメリカ）江為留学遣すニ付，横浜迄出立」

である。

そして，ついに7月25日にコロラド号でアメリカに向けて出発する。勝海舟の長男「小鹿」に，富田鐵之助と高木三郎が同行した。さらに仙台藩からは，先に述べたように通弁修業・富田の従者（幕府発行の渡航免状での身分は，「仙臺藩百姓」）の形をとって，高橋是清と鈴木三郎もコロラド号に乗船した。小鹿・富田・高木は「上等船室」，高橋・鈴木は「下等船室」であった。このときのエピソードは，『高橋是清自傳』が詳しいが（pp.34-37），海舟の長男「小鹿」は，明らかに私費留学であるので，『高橋是清自傳』の「勝小鹿，富田鐵之助，高木三郎の三氏には，それぞれの藩から學校に入つて勉強出来るだけの手當をくれる事（p.31）」は，是清の勘違いである[8)]。なお，「海舟日記」には，富田の従者である高橋是清と鈴木三郎の記載は，まったく出てこない。

「海舟日記」では，この日について

［慶應3（1867）年7月25日］

「本日，金川（神奈川）よりコルラード＜コロラド号＞出帆，小鹿美里堅江行く，

昨夜之便ニ而云，英（ママ）公司ガラルヲルスより頼まれたる由ニ而，

小鹿華盛頓＜ワシントン＞迄同行すと聞く，依之万事大都合と成る」

と記載している。ガラルヲルスは，「海舟日記」の脚注によれば，「J.G.ウォルシュ（アメリカ人貿易商，もと長崎領事）」である。この日について，海舟は，佐藤与之助宛の書状（8月17日付）で，悴の小鹿が，高木・富田とともに，飛脚船で米国に出発したこと，さらに親として旅の安全と学問の成就を願っていることを伝えている（『勝海舟全集　2　書簡と建言』，p.91）。

さらに，海舟は，小鹿が心配に思ってか，横浜に出張した際に，米国人ワルス（先に記載したワーシ。アメリカ人貿易商のT. ウォルシュ。J.G.ウォルシュの兄）を訪ねている。すなわち，

［9月29日］

「教頭為尋問，横浜江出張，

ワルス氏を尋ぬ，同人云，小鹿事は，懇意家ポストン之住人ホスベルス氏江

委細頼ミ遣し候旨話有之」

である。

慶応3年～慶應4年（明治元年）は，日本史に残る将軍慶喜の大政奉還や鳥羽伏見の戦い等があった。海舟も，慶應4年1月，海軍奉行並や陸軍総裁に任命され，政務・軍務に多忙を極めたが，小鹿の学資・生活費も手配も忘れはしない。小鹿に同行した富田・高木の分を合わせて2300両の為替の送金について，次のように記載している。すなわち，

8）　高橋是清の伝記としては，『高橋是清傳』と『高橋是清自傳』が知られているが，記載内容に重複があるので，本稿では，『高橋是清自傳』を引用する。なお，吉野（1997）によれば，「初版の刊行日付は昭和11年2月9日で，2・26事件の勃発により高橋が暗殺されるわずか17日前であった。高橋の死は国民一般に深刻なショックを与えたため，その直前に公刊された『高橋是清自傳』は死後一躍当時のベストセラーとなり，・・・（pp.266-267）」である。事実，東北学院大学図書館所蔵（小田忠夫文庫）の『高橋是清自傳』は，比較的早い翌月の3月14日のものであるが，「75版」である。

［慶應4（1868）年1月29日］

「横浜ヲロス［T. ウォルシュ］方江，太田源三郎を介し為替金弐千三百両，

小鹿・富田・高木三人分持せ遣す（浜武・山田持参ス）」

である。

慶應4（1868）年3月13・14日 は，「勝海舟と西郷隆盛との会談」によって，江戸城の無血開城を決定した日であるが，「海舟日記」では，13日については記載がなく，14日についても，「西郷吉之助江面会，天下之大勢愚存書を送くる・・」との記載にとどまっている。他方，後に公開を目的に増補したものと考えられる「慶応四年戊辰日記」（講談社『幕末日記』，pp.33 ～ 36に所収）では，13日については「高輪薩州之藩邸に出張，西郷吉之助江面談す。・・・」との記載をするとともに，14日 については，江戸城開場の条件等にも詳細に記載している。すなわち，

「同所に出張，西郷江面会す。諸有司之歎願書を渡す。

第一ケ条　　隠居之上，水戸表江慎罷在候様仕度事。

第二ケ条　　城明渡之儀は，・・・・・・・・・・・・」

である。

江戸城の無血開城には，3年前のアメリカ南北戦争とリンカーン暗殺，すなわち，

［慶應元（1865）年閏5月3日］

「米利堅之合戦和睦ニ成，其後

北方之大統領幷次官等戯場にて南方余党之為に

炮殺せられたりと云」

が海舟の考え方に大きな影響を与えているとも言われているが，これについては海舟研究者にその妥当性の是非を委ねたい。

慶應4（1868）年4月11日に江戸城の引き渡しは終わったものの，閏4月には奥羽列藩同盟が結成され，5月には上野彰義隊の戦いも起こった。海舟は，これらの動向を日記に記載するとともに，小鹿等との書状のやり取りや仕送りについても記載している。すなわち，

［慶應4（1868）年閏4月15日］「米教師江ハラヲ江頼ミ米国豚児［小鹿］江金差遣す」

［6月5日］　「柳屋江頼ミ米利堅小鹿方江差遣一封頼ミ候事」

［6月19日］「横浜貞次郎［本多貞次郎］より米国四月十一日出之書籍入箱 □（虫損）届来ル，

太童江富田之書状而已入る」

である。仙台市博物館には大童家文書が寄託されているが，この中には富田鐵之助から大童信太夫へ出された書簡も20通以上保管されている。富田の渡米直後のものとしては，「江戸（芝）愛宕下　仙臺藩中屋敷　大童信太夫[9]」宛の封筒も3通残されている。6月19日の条に記載された書

9）『高橋是清自傳』も，「仙臺中屋敷（p.10）」としているが，Smethurst（2007）では，なぜか ”the lower *yashiki*（p.16）“（日本訳も「芝愛宕下の仙台藩の下屋敷（p.9）」）となっている。現在の「東京都港区塩釜公園・塩竈神社」は，仙臺中屋敷にあったとされており，その敷地面積は1万坪を超えていた。『高橋是清自傳』によれば，留守居役と物書役の役宅が3軒ずつと（高橋是清の養子先である）足軽小者らの住宅が60軒余りあったという（p.13）。

状は，富田が3月13日付で出した書状と思われる。なお，この書状は，吉野（1974）の「pp.393-394」にも採録されているが，慶応4年は，閏4月もあったことを勘案すると，実に，約4か月を要して届いたことになる。

書状については，さらに

［6月21日］「貞次郎江頼ミ，米国江之書状一封頼ミ遣す，当廿八日頃船便と云」

［6月26日］「米国より閏四月八日附之一包，高木屋敷江届呉様申越す，
林研海方より届来る」

［7月2日］「米国より四月十二日出之書状到着　何礼之助方より差越」

［8月23日］「横浜米利堅一番之番頭松屋伊助より使あり，
云，米国より便到る，家来可差越と云」

と続く。また，小鹿への2回目の送金については，

［8月20日］

「小鹿留学之手当金頼遣す，但白戸江詫（託）し御用達江預候約也」

［8月30日］

「米利江書状差出ス・・・・
桜井庄兵衛明朝出立，小鹿留学之手当百両
来二月十日迄用立，別ニ家属手当金五拾両持参を頼む」

と記載している。

『勝海舟全集　別巻　来簡と資料』（講談社）には，「小鹿・（富田）鉄之助・（高木）三郎」宛の書状3通（慶應4年8月30日付，9月25日付，明治3年8月26日付）が採録されている（pp.612-616）。宛名は，いずれも3名連名である。この8月30日の書状は，戊辰の戦乱の状況（「海舟日記」に記載された戦乱の状況を，日記文から書状の文体に書き直して）伝えたものである。残念ながら，この書状は，次で述べる事情により，残念ながら富田と高木には届いていなかったのである。

6　緊急一時帰国と再渡米

慶應4（1868）年4月11日に江戸城の引き渡しの後も内戦が続いたが，9月にはほぼ終結した。その間の状況については，「海舟日記」や「慶応四年戊辰日記」に詳細に記載されているが，ここでは最終項目のみの紹介にとどめる。すなわち，

［慶應4（1868）年9月7日］

「当月三日，若山（松）落城，仙台伏罪，庄内江は西郷吉之助先鋒討入ると云」

［明治元（1868）年9月20日］

「御発輦廿日之旨，一両日前御布告」

である。会津若松城の落城を受けて，公式には，9月8日に「慶應」から「明治」に改元とされているが，「海舟日記」からすると，改元の布告は20日の数日前ということになる。

日記の記載はないが，海舟は，9月25日にも，「小鹿・鉄之助・三郎（3名連名）」宛の書状（『勝

海舟全集　別巻　来簡と資料』（講談社）に所収）を出し，先の書状後の戦乱の様子，惨事，終結を伝えるとともに，末尾に「当九月改元，明治と相成，是より一代一度改元有之旨也。」と結んでいる。

これ以後は，「富田と高木」も「海舟日記」への記載が増える。まず，

［明治元（1868）年11月18日］

「此夜，米利堅より富田・高木両人帰国，々元之変動を聞て也，帰後に悔と云」

である。

渡米直後の富田鐵之助から大童信太夫宛の書状のうち，慶應3年11月9日と翌年1月3日（大童には，3月22日に届く）の書状は，米国での見聞と近況報告（本人の近況，サンフランシスコに滞在している（富田とともに渡米した）高橋是清・鈴木知雄の近況，（ともに仙台藩を脱藩し，すでにサンフランシスコ留学中の）大條清助・一條十二郎（十次郎）の消息）が主な内容となっているのに対して，慶應4（1868）年1月26日（富田は，日付として「西暦2月29日認」も併記している）と3月11日のものは，極度に切迫した内容のものになっている（この2通は，吉野（1974）のpp.390-394 に採録されている）。

1月26日の書状では，まず，ニューヨークの新聞が（サンフランシスコからの電信として）日本国内の状況を詳細に報道した内容を日本語に直して復唱するかのように書き，続いて，国もとの衰興に関わることなのでここに滞在することは不本意であるが，「勝若子（小鹿）」に随って来て，軽々に進退を決めることもできないので，この点について「賢慮」願いたいこと，また，「勝若子」も同じ事情であるので，勝先生にも書状を出したこと，大童からの返信は，同封の封筒を「横浜夷人飛脚屋」から出せば，富田の知人の米国人に届くこと等を書き記している。

3月11日の書状では，いずれからも返信がないので非常に失望したこと（「甚失望罷在候」），サンフランシスコの大條清助からの手紙によれば，コロラド号でともに渡米した高橋是清と鈴木知雄（「高鈴ノ両児」）も帰国を望んでいるが，動揺しないように伝えたこと，どんなに倹約しても別紙の調べのように費用がかかるので，この二人には先に食費分だけでもいいので送ってもらいたい旨を書き記している。

慶應4（1868）年1月3日に，「合衆国ニーセルシー・ニーブリンスウヰキ」から「江戸芝愛宕下仙台藩中屋敷」の大童信太夫宛に出した書状が，3月22日に届いたことからすれば，1月26日の書状が届いたのは，もっと後ということになる（当時，日米間の定期船は年4回とされている）。従って，緊急性があり至急の返信がほしい富田が，3月11日の書状の中で，「何方よりも音信無之甚失望罷在候」と書いているが，大童や海舟にすれば，届いていない書状に返信ができないのは当然のことであろう。

このような状況の下，富田と高木は，相談の上，小鹿の後見を横井小楠の甥に託して帰国するのである。横井のもとに坂本龍馬を使いに出していることからも分かるように，横井は勝が尊敬する人のひとりであった。すなわち，

［文久4（1864）年2月19日の上欄］　「横井先生へ龍馬子を遣る」

［元治元（1864）年4月6日］　　「龍馬を横井先生方江遣す」

である。また，横井小楠の甥に関しては，この日の日記の上欄に，「横井先生の親族　三人入門，同行す」と記している。「海舟日記」の脚注には，「小楠の甥佐平太・大平および小楠の門下の岩男内蔵允の3名」とある。さらに

［慶應2（1866）年4月1日］　　「肥後藩兼坂熊四郎・馬渕慎助来る，小楠之書翰持参，
聞く，小楠之甥予か門横井佐平太・（ママ）　之両人，
国侯命にて米国江留学，長崎より発船す」

との記載をしているので，小鹿の後見を託した横井小楠の甥は，海舟門下の横井佐平太とその弟の大平であることが分かる。この横井佐平太については，

［明治2（1869）年7月13日］

「横井佐平太，当時沼川三郎，米国より帰国，悴之壱封相達ス，
フランシスコよりニーヨルク之鉄道落成，米里三千里八日ニ達すと申越す」

と記載されているが，正しくは，弟の「大平（沼川三郎）」が肺病のため帰国したのであった。

富田の1月3日の大童宛書状には，ボストンからニーブリンスウヰキに転居した旨とそこには横井平四郎（小楠）の子息二人がいる旨も記載されている。これを受けてか，『仙臺先哲偉人錄』では，「小麓の介護を伊勢，沼川（兩人とも横井小楠の子）に依頼し（p.388）」とし，また，吉野（1974）が引用している『高木三郎翁小傳』では，「協議の末當時ニウブルンヅウヰックに滞留せる横井平四郎（小楠）の甥伊勢氏に事情を具して小鹿氏を託し（p.23）」としており，「続き柄」について混乱が見られる。慶應2（1866）年4月1日の条については，『幕末日記 』（講談社）にも，同文が所収されているが，その補注35（p.409）には，名前が欠けているところは，「弟「大平」である。共に小楠の兄の子供」，「形式的には，左平太が小楠養子で大平は養弟。」，「出発のときは完全な自費で，しかも幕府が留学承認の方針を出す前だから，密航同然だった。」とあるので，4月1日条で海舟自身が記載した「続き柄」がもっとも正確ということになる。なお，横井の長男「時雄」（後に同志社第3代社長（総長））は，一時期，変名として「伊勢」を名乗っていることから，より一層の記述上の混乱が見られたのかもしれない。

さて，話を少し戻すと，富田と高木は，慶應4（1868）年6月20日にニューヨークからアラスカ号に乗船しパナマ経由で，7月16日にサンフランシスコに着く（『仙臺先哲偉人錄』，p.388）。『高橋是清自傳』には，是清がだまされて奴隷に売られたが，富田が一計を案じ救出したエピソードが載っている（pp.63-65）。これは，富田のこの帰国の時のエピソードである。

サンフランシスコ出発は，ほぼ2か月後の9月17日であったが，台風にあい46日目に香港に着き，さらに，香港からの便船によって11月17日に横浜に入港したものであった（吉野（1974），p.23）。ところで，『仙臺先哲偉人錄』，p.388では，横浜入港を11月19日としているが，先に紹介した「海舟日記」の11月18日の条「此夜，米利堅より富田・高木両人帰国，々元之変動を聞て也，帰後に悔と云」とは齟齬が起こる。

この11月18日の条は，このように簡潔な記載であるが，『仙臺先哲偉人錄』では，二人が海舟

に帰国理由を説明すると，海舟は，大声で，君らは何のために帰ったのか，徳川の政治を続けることは「到愚迂濶」の極みである，君らを海外に出したのは外国との大事に備えるためである，軽々に帰国したことは私の考えではない，と諭したされている。これについて，武田（1972）では，『仙臺先哲偉人錄』，『桃生郡史』，『郷土人物伝』を比較考証し，ほぼ同様の内容であるとしながらも，『仙臺先哲偉人錄』には，東北は人物が乏しく，世界の大勢を知らない，忠告するも理解ができない，君らを海外に出したのは東北の人材を補うためだと叱責された旨の記載がある点が異なっているとしている。

『仙臺先哲偉人錄』では，11月19日横浜入港，20日海舟宅を訪問したとされている。その翌朝（21日），恐る恐る海舟宅を訪問したところ，海舟は不在であったが，侍女から「あまりにも激しく叱かり過ぎた」と思っていることを聞き，午後に改めて面会した。このときは，昨日とは打って変わった応対であり，幕府崩壊，江戸城引き渡し，今後の日本のとるべき方針等を話した後に，最後に，これからどうするのか，再渡米を望むとしても留学の費用は藩からは出ないと思うが，それについては心配しなくともよいから，熟考の上，返答せよと話があったという。そこで，22日には，米国に再び渡航する決心を伝えたとされている。

上のような経緯や再渡航の決心については，「海舟日記」には一切記載がない。淡々と以後の事実が記載されているのみである。すなわち，

［明治元（1868）年12月1日］「勘定所江，小鹿留学之金五百両東京江為替相頼む」
［12月7日］　「為替金五百両受取」
［12月8日］　「高木・富田横浜江行，御印章＜パスポート＞野口より受取」
［12月11日］　「高木米国行ニ付，五百両渡ス」
［12月12日の上欄］　「吉兵衛より大判二，甲州金弐，小判廿五枚受取，米国江遣す分也」
＜日記本文の記載事項＞
「仙台楽（額）兵隊長星恂太郎と云，富田世話いたし遣候者，
太童を以て可説と聞く
富田鉄之助，明日横浜江出立，米行再度之積也」
［12月19日］　「高木・富田本日出帆」

となっている。12月12日の条の「星恂太郎」は，仙台藩の洋式軍隊である額兵隊長であるが，仙台藩降伏後は，部下とともに，箱館戦争に参戦していたのである。榴ヶ岡天満宮（仙台市宮城野区榴ヶ岡）には，明治29年12月に建立された「星恂太郎碑（榎本武揚題額・大槻文彦撰文）」が残されている（なお，碑文は，片平（1979）のpp.283-284に採録されている）。この碑文によれば，攘夷派の「星」は，金成善左衛門等とともに，佐幕・開国派の「但木土佐と大槻磐渓（文彦の父）」の「刺殺」を企てたが，磐渓から海外の動向を諭され，横浜で英国式兵学を学ぶこととなった。この時，但木土佐を説得し，星の窮地を救ったのが，富田鐵之助であった。これが，「海舟日記」の「富田世話いたし遣候者」の内容である。その後，星は，横浜で英国式兵学を学びながら，アメリカ商人ヴァンリードの店でも働いていた時期に，高橋是清も，横浜で英学修行（住

み込みのボーイ）に出ていた。高橋の品行不良により米国留学から外されそうになったのを,「星恂太郎から大童信太夫宛」のとりなしの添書を書いてもらい,留学が実現しているのである（『高橋是清自傳』，pp.29-31）。

このように，仙台藩では戊辰戦争は終結したものの箱館戦争の対応に追われる中，12月19日，富田と高木が横浜から出港したのである。その直後の書状の往来については，次の条の記載がある。すなわち，

［明治2（1869）年2月27日］「定（貞）次郎，高木之手紙頼ミ遣す」

［4月26日］　「米国より来状，駿河屋久兵衛持参，二月廿日高木・富田着ニ付一封
　　并佐藤・金沢・岡田共々三封入手」

［4月28日］　「高木三郎より佐藤并金沢・岡田江之書状，宅江遣ス」

である。

この間，3月21日条では，小鹿から海軍学を学びたいという旨の書状か来たので，政府に問い合わせたところ「ミニストル江一言御頼有之は入学出来」と返事があったこと，4月20日条では，横浜のワルスへ小鹿の学資として1000両の為替を預けたことが記載されている。

より重要な条は，小鹿・富田・高木の3人の私費留学が官費留学に切り替わることを記した条である。この経緯を順に紹介しよう。そのきっかけは，

［明治2（1869）年3月20日］

「海外江留学之者入費，従　朝廷御貯被下置旨ニ付，其主人より可願旨，
　　加藤弘蔵［加藤弘之］より申来る」

［3月24日］　「留学者之事ニ付願書差出ス」

であった。翌25日には，加藤弘之に会いこの件を頼んでいるが，結果は，残念ながら

［4月12日］　「留学入費之義願不叶」

であった。

ところが事態が急展開し，2か月後には，

［6月13日］　「当月九日出関口之書状到来，
　　外国留学之者入費弥　朝廷より被下置候旨也」

［6月22日の上欄］

「去ル十八日悴并高木・富田共留学入費，六百弗宛被下置旨御達」

となったのである。

この点は，吉野（1974）が，東京都政史料館（現在の東京都公文書館）の「東京府知事履歴書（富田鐵之助氏履歴）」からの引用として，

「其方儀　亜米利加合衆國學校に於テ・・・
　一ケ年ニ付メキシカンドル六百枚　爲學資被下候（p.26）」

をあげていることに符合している。なお，この文書の発令者は，外務卿（明治2年7月）である。

幕府が崩壊し，仙台藩と庄内藩も降伏する中での富田と高木の再渡米では，経済的に窮地に陥

ることも予想されたが，官費が給付されることによって留学が確実に成就されることとなった。

ところで，海舟は，二人の再渡航に際し，「留学の費用は藩からは出ないと思うが，それについては心配しなくともよい」旨を述べたとされているが，（再渡航からほぼ1年半後の）後日談が「海舟日記」に記載されている。すなわち，

［明治3（1870）年8月2日］

「岡田斐雄［庄内藩士］，太童［大童信太夫］之事，留学之金子之事談す」

［8月8日］　「仙台藩林権少参事，冨田之礼として来る」

［9月25日］　「仙台・庄内江冨田・高木，学費立替之事催促申遣」

［閏10月1日の上欄］　「仙台より冨田之事問合返事遣す」

である（8月2日条の海舟と庄内藩士・岡田斐雄が，大童信太夫の事を談じた件については，次節（明治3（1870）年9月7日条）で詳述する）。

明治3・4年の「海舟日記」には，金銭の出納の記載が数多く見られる。旧幕臣の経済的支援等に明け暮れ，海舟自身の台所事情も非常に逼迫していた。経済的窮乏に陥り，仙台藩と庄内藩に対して，二人に学費立て替え分を請求したものの，両藩ともに戊辰戦争の敗戦処理に精一杯で，海舟への返答は芳しくない。それでも，翌年には（高木の再渡米から2年以上過ぎてから）

［明治4（1871）年3月20日］

「橋爪正一郎，大泉藩高木留学雑費立替之内　弐百両并岡田斐雄書状持参」

であり，庄内藩（大泉藩に名称変更）は，高木の留学雑費のうち200両を返済しているのである。さらに，半年後には

［9月12日］　「仙台歟或者庄内江小子用立金之内受取遣可申と申談す」

［10月4日］　「人見・和田，庄内方高木三郎留学取替金三百両返弁，
直ニ榎本行蔵江用立」

とあるように，庄内藩は，さらに300両を返済している。この点に関し，『勝海舟全集21 海舟日記Ⅳ ほか』（勁草書房，1973年）の所収の「会計荒増」の明治4（1871）年10月4日の条（p.575）には，

「三百両　榎本弘蔵へ借＜貸＞
自分金庄内より高木三郎留学立替金返る分」

と記載されている。

これにより，庄内藩（大泉藩）からは，合わせて500両が返済されたことになる。この金額は，先に述べた明治元（1868）年12月11日条の「高木米国行ニ付，五百両渡ス」に対応する金額となっている。

しかしながら，海舟の返済請求にもかかわらず，「海舟日記」には仙台藩からの返済の様子は記載されてはいない。しかし，この7年後には，

［明治11（1878）年12月23日］

「富田鉄より，先年留学立替金，二百五十円預り置く。（勁草書房版）」

の記載が出てくる。また，前述の「会計荒増」の同日の条にも（p.609），

「富田鉄より二百五十円預り置く。先年留学立替金」

との記載があることからすれば，富田の留学費用の立て替え金（高木と同額の500両と推察）のうち，仙台藩からの返済は半分で，海舟の台所に窮状を察した富田が自ら残りの250円を返済したものと考えることができよう。

明治4（1871）年の貨幣条例によって，明治政府は，金本位制をとることとし，1円＝金1.5グラムとした。これにより，1円＝1両の日本国内での両と円の等価交換体制ができ上がり，また，偶然にも，1円＝1米ドルとなったのである。従って，当時としては（明治11年でも），物価変動や利子等を考慮に入れなければ，1円＝1両の換算は，当然のことであった。なお，両から円へ実際の移行の時期は，翌明治5年であるが，「海舟日記」においても，しばらくの間，円と両の2つの記載が混在していることを付言しておく。

ところが，富田の250円の返済からほぼ1月後のクララの日記（クララ・ホイットニー『クララの明治日記　下』）には，

［明治12（1879）年1月20日］

「（富田さんの奥さんは）高木三郎氏の奥さんが嫌いなのだが，好きな日本人はほとんどいない。高木夫人は傲慢で・・・勝家を訪問した時も，・・・『ご機嫌よう』とか『始めまして』ということばを勝さんのほうで言われたのに対して，・・・返礼のことばも言わず，三郎氏のアメリカ行の費用を勝さんが出してお上になったお礼も言われなかった。もちろんこれは十年前のことだが，それだからお礼を言うのが礼儀というものだ（p.67）。」

という素直で辛辣な記載がある。クララは，後に海舟の四男の「（梶）梅太郎」の妻となる人物である。明治8（1875）年8月，クララが14歳のときに，父ウィリアム・ホイットニーが東京の商業学校（後の商法講習所。一橋大学の前身）の教師に請われたために，一家で来日した。一家の世話役の中心が，富田鐵之助夫人の「縫」であったことを割り引いても，当時18歳のクララは世情によく通じている。ただし，「海舟日記」の記載からすれば，高木の留学費用は，庄内藩が返済しているのに対して，富田の費用は，前年12月まで未済であったのだが，クララの日記からすれば，富田夫人は庄内藩の完済までは知らなかったと思われるのである。

明治2（1869）年4月28日以降も，書状の往来等の記載があるが，紹介を省略して先を急ぐことにしよう。

7　戊辰戦争と仙台藩

富田は，日本国内の戦乱の報に接し，小鹿の世話を横井兄弟に託して，国もと仙台藩の存亡を心配しながら，アメリカから帰国したのであった。そこで，「海舟日記」を中心に戊辰戦争前後の仙台藩を見ることにしよう。仙台藩についての最初の記載は，

［慶應元（1865）年6月4日］

「此頃仙台侯［伊達慶邦（陸奥仙台藩主）］，御留守御警衛歟，多人数にて出府」

である。また，個人としての最初の重要な記載は，

［慶應2（1866）年4月20 日］　「仙台藩岩渕喜英来る」

である。これ以後，岩渕英喜は，「海舟日記」には何回か登場する（ここでの表記は，「喜英」であるが，後の記載では「英喜」である）。岩渕（淵）については，『高橋是清自傳』では，是清が5歳の時，躓いて転んで御三家の早駆けの馬蹄に踏まれたが運よく難を逃れたエピソードとともに，「後で，仙臺藩の馬の指南役岩淵英記という人がそれを聞いて」という形で記述されている（p.12 ）。また，この「岩淵英喜」について，逸見（1984）は，後述のまったくの別件を取り扱った論文において，「富田鉄之助の乳兄」としているのである（p.178）。

吉野（1974）は，「（鐵之助の）母は岩淵英七道貫の女で，鐵之助だけ他の兄姉と異なり母が別であった（p.12）。」としている。さらに，吉野が引用した富田日記（明治21年3月11日条）には，「岩淵兄ト龜井戸天神ヨリ臥龍梅を訪ヲ（p.412）」との記載も見られるのである。親戚の年長の者を「兄」と呼ぶこともあるが，小野寺（2007）は，明治20年代に内ケ崎作三郎[10] が旧制二高在学中に富田氏の同母兄岩淵廉氏の宅に寄寓していたことを指摘している（p.69）。このもととなった資料は，内ケ崎（1934）の『文藝春秋』（昭和9年8月号）掲載されたエッセー「綠陰閑話」である。原文を確認すると，話題の中心は本稿でも後で言及する「新井常之進（奥邃）」である。確かに「私が仙臺二高在學七年のうち，約六年半は富田氏の同母兄岩淵廉氏の宅に寄寓してゐた。金成氏は岩淵氏の甥に當つて，ゐたので富田氏とも關係がついたことゝ思ふ（p.224）。」という記述もあり，富田と後述の「金成善左衛門」との関係も示唆されていた。

『仙臺先哲偉人錄』では，富田が10歳の時に一家が仙台から在所に引き払った際には，岩淵宅に寄寓したとあり，17歳の時，一家が仙台に戻ったので，「馬術（八條流）を岩淵甚右衛門に」学んだとしている（p.85）。岩淵英喜，岩淵廉，富田の寄寓先の岩淵宅，馬術の岩淵甚右衛門の関係は不明であるが，少なくとも富田とは縁戚関係にあるように思えるのである。

「海舟日記」には，会津藩もしばしば登場するが，会津藩士としては，「山本覚馬」が何度か登場する。同志社を設立した新島襄の妻「八重」が覚馬の妹であることもあってか，「新島襄」も，明治12年2月以降，「海舟日記」に登場する。

さて，仙台藩については，慶應2（1866）年7月25日条の「奥州（二本松・三春・相馬・福島・仙台）の百姓一揆の件」の記載の後は，

［慶應3（1867）年11月18日］　「仙台家老但木土佐来訪，艦之話有之」

に注目する必要がある。「但木成行招魂之碑」の碑面を富田の依頼により勝海舟が揮毫したことに関する調査が，本稿の作成の直接の契機であったが，「海舟日記」での「但木土佐」の記載は，この箇所1か所のみである。

慶應3（1867）年10月の大政奉還以降，12月の王政復古，翌年1月の鳥羽伏見の戦い，3月の海舟・

10）内ケ崎は，大正デモクラシーで著名な吉野作造の旧制第二高等学校・東京帝国大学時代の2年先輩にあたり，吉野にも思想的影響を及ぼした人物として知られている（早大教授から衆議院議員となり，昭和16年衆議院副議長）。なお，和泉（2008）によれば，内ケ崎と吉野他1名が，内ケ崎の旧制第二高等学校卒業を控えた1898年7月3日，仙台浸礼基督教会（現在の仙台ホサナ教会）で洗礼を受けている。

西郷会談，4月の江戸城引き渡し等があったが，奥羽では，1月に会津藩追討令が出されたことを受け，新たな展開が始まった。これを「海舟日記」で見ると，

［慶應4（1868）年閏4月12日］

「仙台岩渕英喜来る，国情且会津之事，奥羽同盟，仙台盟主之心得にて，会より
申立ル三ヶ条　　伏見暴挙之隊長之首差出，会主城外江慎居，城附之外上地之等也
官軍許容無之ニ於而は，仙台表之人数解兵可致決心之旨也
軍艦之事内話，太童信太夫近々右之事ニ付参府と云」

［閏4月13日］

「岩渕英喜呼寄，会藩之趣意且仙台之国論等，
益満＜益満休之助（薩摩藩士）＞ヲ以て参謀＜西郷隆盛＞江申立ル」

である。この記載は，仙台藩では，閏4月9日，家老の但木土佐と坂英力が会津藩の歎願書を受け取り総督府に提出することを決めるとともに，奥羽列藩の家老等は「白石」に会したことを差している（『仙臺藩戊辰史』を参照のこと）。

さらに，仙台藩関連の閏4月15日条の記載に続いて

［閏4月19日］　「仙台大童国許より来る，会津之事情并歎願書等持参，
参謀江内々相廻す」

である。この日の記載は，「閏4月11日，米沢侯自ら白石城に来て，仙台侯と会津降伏の要件を協議したこと，翌12日には，仙台侯と米沢侯が九條総督に対して会津藩の歎願書を提出したこと」を差している。この時には，3種類の歎願書，すなわち，「閏4月11日付の仙台侯と米沢侯の連名の歎願書」，「閏4月付の会津歎願書（西郷頼母・梶原平馬・一瀬要人の3家老連署）」，「閏4月11日付の奥羽各藩家老連署歎願書（奥羽24藩の家老連署。仙台藩，米沢藩，相馬藩の各藩は，家老2名が連署）」が提出されている（これらの歎願書は，『仙臺藩戊辰史』に所収されている）。

大童信太夫が，仙台から江戸へ戻ったことによって，海舟との間で「艦」の話が進展する。すなわち，

［閏4月23日］　「大童江大江丸二万五千両，黒龍丸三万両ヲ以て御払渡之事談す，
且大崎屋敷小子江譲る之談あり」

［閏4月24日の上欄］　「黒龍三万両　大江弐万五千両　米ニ而　払代受取之積」

＜日記本文の記載事項＞「船御払之事，司農江談，承知之事」

である（黒龍丸は，海舟が軍艦奉行並のときに責任者を務めた神戸海軍操練所の練習艦であった）。この件に関し，翌日の閏4月25日に，海舟は大童信太夫宛に2通の書状（大童家文書）を出し，「黒龍丸の修復の状況は横須賀に出向けば確認できること等」と「船の払い下げ代については幕府の勘定奉行も承知したこと等」を知らせている。なお，23日条の「大崎屋敷」は，「（仙台藩）下屋敷の一つに大崎袖ヶ崎屋敷がある。今の東五反田三丁目にある清泉女子大学のところにあった（宮城（2006））。」に関する記載である，

閏4月29日条や5月8日条にも，大童や松倉良輔（後の松倉恂と改名。最初の仙台「区長」）の記

載があるが，戦局は急展するので，これを紹介する。すなわち，

［慶應4（1868）年5月9日］「太童信太夫来る，屋敷譲受之証書遣す・・・・・
彰義隊東台ニ多人数集り戦争之企あり・・・」

［5月10日］　「聞く，増上寺江銃隊屯集すと云」

［5月14日］　「仙台にて長州之参謀　（ママ）　を暗殺之拳」

である。長州の参謀は，「奥羽鎮撫総督府の下参謀」の「世良修蔵」のことである。世良は，先の会津歎願に対する強硬な態度や軍紀の乱れ・兵の乱暴狼藉等に対する仙台藩士の怒りをかい暗殺されるに至った。これ以後，奥羽では，軍事的緊張が一層高まる。すなわち，

［慶應4（1868）年6月2日］

「肥後藩竹添他両人，仙台より帰着来訪，同国憤発，諸家ニ喋して戦之気ありと云
・・・・・
宮島誠一郎［米沢藩士］来訪，仙台家老坂英力，米沢用人（ママ）等同船，
会津之歎願をとりて　朝廷江懇願し奉り，名義を立て官軍と一戦せむと云，
同盟諸侯之儀なり，其可否如何を聞かむと」

［6月3日］

「榎本和泉［武揚］，白戸石介，仙台・米沢之儀（議）論を助けて衆評せむと云，我見る所別ニあり，此大意を挙て答ふ，当今大事を成すは国之大にあらす，人之多きにあらす，唯人才に在り，今哉東国人才あるを聞かす」

である。『仙臺藩戊辰史』では，5月28日，仙台藩の坂時秀（坂英力）・笠原中務・太田盛ほか1名と米沢藩宮島誠一郎ほか1名が，「奥羽列藩家老連署歎願書」を携えて，海路で江戸に向かったけれども，上野での戦争の後であり，品川から上陸できない状況であったことから，太田盛・宮島誠一郎ほか1名が京（京師）に行き歎願書を奉呈したと記している。『仙臺藩戊辰史』に所収の歎願書には，26藩27名の家老の名前が記載されている（ただし，日付は空白）。しかしながら，上に紹介した「海舟日記」では，仙台藩の坂英力等と船に乗り，4日後に江戸に着いた米沢藩士・宮島誠一郎が，海舟を訪問し，会津歎願の件，名分を立てての官軍との戦いの件，諸侯の動き等を尋ねているのである。

6月7日には，西郷隆盛が奥州に向けて出発するが，仙台藩・米沢藩から新政府に提出する歎願書が，海舟の目にとまることになる。すなわち，

［6月11日］　「仙藩笠原中務・米藩宮島誠一郎・仙太田盛来る，
奥羽陪臣歎願書持参一見，内甚不敬之文体故，添削いたし遣不可燃と云」

［6月13日］　「大童信太夫来訪」

［6月16日］　「宮島誠一郎上京，主人之意を達せむとする之説あり，添書添削」

である。

さらに，6月21日条は，仙台藩では，さらなる戦闘体制に入ったとする記載である（既述のように，この日の条には米国への書状を頼んだ件も記載されている）。すなわち，

「仙台江種紙交易として外国船三隻計行く，或は大炮・小銃ニ換ゆ，官吏知て不咎」
であるが，2か月後の結果は，
［8月24日］　「仙台は近く伏罪之状顕せり，兵弱くして官兵是をあなとる
米・庄は各官兵御差向，格別はけしき戦無し，
唯々勇猛死を期して戦ふ者は会藩人而已と云」
［9月1日］　「奥州此程迄は弱かりしか，阿隈川（阿武隈川）近傍迄ニ押詰甚強しと云」
である。

9月5日条では，8月21日から27日までの会津での戊辰戦争の状況を詳細に記載した後，
「米沢は伏罪，仙台を説得すへき旨，若不聞時は一手を以て討入らむと云と」
と記載している。そして，9月7日条では，先に紹介したように，
「当月三日，若山（松）落城，仙台伏罪，庄内江は西郷吉之助先鋒討入ると云」
である。

戊辰戦争の終結により，幕府の行く末（9月2日条）や先に述べた明治への改元（9月20日条）が決まる。後者は，すでに紹介したので，ここでは前者をあげておく。すなわち，
［9月2日］　「小拙願立之内二ヶ条，所謂清水十一万石并駿州近傍にて七拾万石，
奥州為替地御渡可有之御内決有之」
である。

先に述べたように，こうした状況に至ることを心配して，仙台藩の富田と庄内藩の高木は，海舟の長男の小鹿を横井小楠の甥二人に託し，慶應4（1868）年6月20日にニューヨークを出発し，サンフランシスコを経由して（7月16日着，9月17日出発），台風に会いながらも，同年の明治元（1868）年11月18日に帰国する。しかしながら，海舟に諭され1か月後の12月19日には，横浜から再び渡米することになる。

8　戊辰戦争後の仙台藩

富田の仙台藩は，戊辰戦争に敗れ伏罪し，その責任を奉行（他の藩の家老に相当する職）の但木土佐と坂英力の二人が，一身に負うこととなった。「但木成行招魂之碑」の碑面（裏面）[11] には

11）明治2年5月に，仙台藩邸で但木土佐の斬死を見守った甥の「但木良治」は，明治27年4月1日に（2度目の）「黒川郡長」に任ぜられている。その在任中に，「但木成行招魂之碑」建立の話が進められたのである。なお，橘（但木）良治は，明治13年11月から明治22年11月まで「黒川加美郡長」に任ぜられている。明治16年10月に宗家の家名再興を許され，本来の「但木良治」に戻っている（『黒川郡誌』，pp.378-379）。また，大童信太夫も，明治24年7月から翌年11月まで，「黒川加美郡長」に任ぜられている（（『黒川郡誌』，p.162）。なお，参照した文献の表現は幾分異なるが，但木土佐や坂英力など政府処分の者は，明治16年に内務省より家名再興を許され，藩処分の松倉恂，大童信太夫，星恂太郎，荒井常之進，金成善左衛門，太田盛等は，明治22年2月に内務省より家名再興を許されたとされている（『仙臺戊辰史』，p.966及び片平（1979），p.197）。明治22（1889）年2月11日，大日本帝国憲法の発布に合わせて，国事犯（政治犯）赦免の大赦令が出されているので，これが根拠のようにも考えられるが，人名までは，未確認である。なお，『福澤手帖』105号に再録された「時事新報（明治22年5月）」の記事によれば，大童について，この年の5月，「官その旧罪を特赦し，家名再興を許す（p.3）」としている。

富田が誌したように，明治2（1869）年5月19日に東京の仙台藩邸において斬死し，高輪・東禅寺の先君の側に葬られたのである（品川駅周辺の再開発事業により，現在，土佐の墓所は，在所の宮城県黒川郡大和町の保福寺に移されている）。

今回，仙台市博物館に寄託された大童家文書の中から，富田が大童信太夫に「但木成行招魂之碑」の碑文を相談する書状（8月13日付）を見つけことができた。招魂之碑建立が明治28年5月とされているので，前年の明治27年8月13日付と推定される書状である。すなわち，

「さてご承知の七峰（但木土佐の在所の名所「七ツ森[12)]」のこと）建碑について文案を上げたところ，気に喰わぬと見えて，別に一文を申してきました。老兄（大童のこと）にも相談したということなのでご承知のことと思います。その中の「観儘梶處於君」云々という文字には同意しかねます。また，「削士籍賜死（但木土佐が士籍を削られ死罪を賜ったこと）」云々は，その通りではあるが，子孫として友人として招魂碑では避けるべきものです。碑は，故人の徳を唱えるべきです。それで，別紙のように書き直しましたので，一読の上，お気づきの点があれば加筆の上，（土佐の孫の）乙橘に示して下さい。今回は，先方の文案も入れて手を加えました。少し略歴も入れましたので面白みがなくなりましたが，私は満足しています。」というのが，その書状の大意である。なお，この書状には海舟の名前が明示的に示されてはいないことを付言しておく。

但木土佐自身は，「一人の学者の説を信じてこの悲境に陥った」と述懐したとされているが，この学者とは，仙台藩の儒学者「大槻磐渓」のことである（鵜飼（1983），p.278及び大島（2004），p.292。なお，この出所は，大槻如電『磐渓事略』と思われるが未確認である）。大槻磐渓自身も，当初は，斬首者リストに入れられていたが，明治2（1869）年6月に「終身禁錮」の刑を命じられ，明治4年4月には「謹慎御免」となっている。大島（2004）によれば，「明治6年11月，但木土佐の東禅寺（芝高輪）の墓に詣でた磐渓の胸には，敗戦の断罪で生死を分けた彼への深い思いが強かった（p.295）。」のである。なお，磐渓の子「文彦」は，最初の近代的な国語辞典である「言海」の編者と知られている。なお，「海舟日記」の明治17年6月26・29日条には，（文彦より）磐渓7回忌法要出席の要請があり出席したこと，明治24（1891）年6月23日条には，「言海」刊行の祝宴があり祝儀を出したことが記載されている。

仙台藩は，禄高62万石から28万石に減じられ，但木土佐と坂英力等が戊辰戦争の責任を一身に負い，責任問題に結着がついたかのように思われたが，その後は，藩の強硬派が藩政を握ったこともあって，仙台藩の内部から戊辰戦争敗戦の責任追求が始まる。本稿の冒頭で紹介した『福翁自伝』の「雑記」の記述の続きでは，「既に政府は朝敵の処分をして事済（岩波文庫版　p.235）」となっていたが，藩強硬派は，「東京の軍務局に密訴」したために，「軍務局はもう一人の藩主の後見である伊達藤太郎を喚問，仙台騒擾のことを詰問」せざるを得なくなるのである（『宮城縣

12）「明治時代仙台に居住した外国人たちも，この山（七ツ森）をセブン・シスターズと呼んでいた。誰の目にも同じだと見える（『要説　宮城の郷土誌（続）』（p.72））。」なお，平成6（1994）年8月，筆者が東北学院大学の全学共通科目「アメリカ研究」のディレクターとして訪米し，オハイオ州アークロンのマーサ・ワイリック先生（1957年～1960年まで東北学院大学で音楽・英語を担当）宅にホーム・スティした際に，先生が"Seven Sisters Mountains"という表現をされたことを思い出す。

史　2　近世史』，p.711)。これを受けて，明治2（1869）年4月には，仙台藩から鎮撫使の久我大納言に対して，「海舟日記」に登場した大童信太夫，松倉恂，太田盛，前述の大槻磐渓，後述の星恂太郎，荒井常之進，金成善左衛門等の責任が報告されるに至ったのである。そして，このとき，大童信太夫は，「黒川剛」と変名し，出奔するに至る（大童家文書には，黒川剛の出奔を伝える藩側の報告書の写し2通（明治2（1869）年4月26 日付と5月19日付）が残されている。)。

『福翁自伝』の説明では「王政維新の際に仙台は佐幕論に加担して忽ち失敗して，その謀主は但木土佐という家老であると定まって，その人は腹を切ってしまったその後で，・・・その実は某主の某主がある，ソレは誰だということに大童信太夫，松倉良助の両人だとこういうわけ訳けで，維新後その両人は仙台へ帰っていたところが・・・その時に松倉も大童も，居れば危ないから背戸口から駆け出して，東京まで逃げてきた，というのも両人ともモウちゃんと首を斬られる中に数えられていたその次第を，誰か告げてくれる者があって，・・・・私は素より懇意だからその居所も知っていれば私の家にも来る（岩波文庫版，pp.235-236)。」である。

この状況のもと，福澤諭吉は，仙台藩主や仙台藩大参事と折衝するほか，薩摩藩公用人を通じて政府の内意を聞く等（「自訴により80日の禁錮」等）の活躍をする。『福翁自伝』には，この時の話を詳しく記述されているが，ここでは紹介を省く。ともあれ，「明治3年閏10月頃から，・・・福澤に因る救助活動（河北（2006)，p.285)」が行われたのである。福澤から大童宛ての書状（明治3（1870）年閏10月14日付。『福澤諭吉書簡集　第1巻』，pp.181-182）では，ここ数日，赦免許可の連絡が来ていないことを伝えるとともに，追伸では，「ひるニ罷出る候節，食料少し持参候積，ひるの御まんま少し御まち被下度奉願候。以上。」と冗談めかした書き方をしている。この結果，福澤の助命運動により，翌4年には罪が許されるのである（河北（2006)，p.285)。ただし，公的には本稿の註11）に記した通りである。

大童の出奔については，福澤諭吉関係と異なり，「海舟日記」にはほとんど記載がない。出奔は，明治2年4月のことであるが，海舟がこれを初めて耳にするのは，明治3（1870）年8月2日 のことである。先に述べたように，

「岡田斐雄［庄内藩士］，太童［大童信太夫］之事，留学之金子之事談す」

である。東京への潜伏については，

［明治3（1870）年9月7日］　「大童信太夫，国許より探索いたすニ付潜伏すと云」

であり，さらに，

［9月22日］　「仙台太童，松倉之事同人内話，召遣候様可然旨」

と続く。この条の前には，「奥州官県江話，頼遣す」の書き込みがあることから，「奥州官県江話，召遣候様可然旨頼遣す」という趣旨になる。これからすれば，海舟は，大童と松倉が助命されることを見越して，二人の出仕を側面から支援（就職支援）していたことになる。

さて，富田鐵之助の生家は，仙台藩では「着座（永代着座二番座)」の家柄であり，父「實保」は奉行（他の藩の家老に相当する職）を務めている。鐵之助22歳の時に，父「實保」が逝去し，富田家は，鐵之助の兄「實行」が継いでいる（鐵之助は「實保」の四男であった（吉野（1974)，P.12

及びp.477))。この兄の「實行」は，（仙台市の真福寺の墓碑によれば）慶應3年1月26日に逝去しているおり，戊辰戦争時の当主は，兄「實行」の子「小五郎實文」である。「小五郎」は，若老・大隊長（元の大番頭）に任じられ，慶応4（1868）年6月28日，歩兵一大隊を長崎丸・大江丸の2艦に分乗させ，「小名浜」に上陸し戦うも，隊は総崩れとなり，小五郎自身も鉄砲で肩等を貫射され負傷している（『仙臺戊辰史』, pp.601-606及び『仙臺藩戊辰殉難小史』, p.32)。富田鐵之助が，仙台藩の状況を心配し，海舟の長男の小鹿を横井小楠の甥二人に託し，ニューヨークを出発したのは，まさにこの激戦の直前（6月20日）であった。なお，大江丸は，「海舟日記」の 閏4月23日条で紹介したように，大童信太夫が海舟との交渉によって2万5千両で購入した船である。

9月の戊辰戦争の最終局面では，小太郎は，仙台城（青葉城）城南の「大年寺」に屯して仙台の守備についている（『仙臺戊辰史』，p.745)。富田鐵之助は，ニューヨークからサンフランシスコ経由するルートをとったが，サンフランシスコを立ったのは，仙台藩が降伏してから半月もしない9月17日のことであった。

明治2（1869）年4月, 仙台藩から鎮撫使の久我大納言に対して報告された富田小太郎の責任は，「賊論（反政府軍論）を主張したこと」と「箱館に渡った仙台藩額兵隊長星恂太郎のもとに金成善左衛門（当時18歳。金森の妹が星に嫁いでいる）を副長として派遣したこと」の2点であったが，6月29日には,「箱館へ脱走した兵に糧米を送ったこと」により,「家跡没収･禁錮」となった（『仙臺戊辰史』，p.926及びp.950)。『仙臺戊辰史』では，これにより，同日，石川大和に預けられ，明治4年4月に蟄居･謹慎の後, 翌年1月に許されたとしているが, 坂田（2001）では, 上の「家跡没収･禁錮」の処分宣告日が明治2年6月28日であり，明治4年3月に「禁錮差免　80日の閉門」としている（pp.644-645)。

富田鐵之助と上の「星恂太郎」の関係は，先に「海舟日記」の明治元（1868）年12月12日条で説明した通りである。

富田の従者の形をとって渡米し，明治元年12月に，富田の再渡米と入れ替わるように帰国した高橋是清と鈴木知雄，さらに渡米直後の富田鐵之助から大童信太夫宛の書状に記載されている一條十二郎（後藤常）の3人は，帰国後に「新政府」からの追及を恐れ，サンフランシスコでの縁を頼りに，薩摩藩の森有禮の家に世話になっていたが，（脱藩渡米の）一條が「仙台藩」に捕縛され，森有禮がこれに談判し救助する事件も起きている（『高橋是清自傳』，pp.75-83及び『森有禮全集　第2巻』，pp.665-673)。森有禮は，明治2年の初めころから廃刀論を主張しその急先鋒であったことから，刺客に狙われていたが，箱館戦争も終結し，前述の金成善左衛門は，森有禮の護衛を務めることなる。林竹二によれば[13],「おそらく旧友一条十次郎（後藤常）の依頼で金之亟（森有禮のこと）の身辺を護るために森家の食客の仲間入りしたのであろう（播本（1996), p.21)。」とのことである。

13）　林竹二は，1969年，宮城教育大学第2代学長に就任した教育哲学者であり,「森有禮」研究や足尾鉱山事件の「田中正三」研究でも知られている。東北学院では，ダンテの『新曲』を日本で最初に翻訳した「山川丙三郎」に師事したとされている。

これに類する事件としては，『福翁自伝』の「発狂人一条米国より帰来」の条（岩波文庫版，pp.195-196, 佐志（2006）, pp.176-177）がある。「江戸中で仙台人と見れば見付け次第捕縛という」時期のことであったが，「横浜の奉行所に捕えられた」ことにまつわるエピソードである。これについては，「『自伝』の･･･仙台の書生でアメリカに留学した塾生の「一条」とあるのは「大条」の誤認（『福澤諭吉書簡集　第1巻』，p.74）」であった。また，河北（2006）も，「福澤がサンフランシスコで一條十二郎に50ドル，大條清助に100ドルを貸したときの両人の借用書が仙台市博物館寄託の大童家文書の中に残されていること（逸見（2000））」や慶應義塾入社帳の記録の精査から，「『自伝』に「発狂人一条」とあるのは，「発狂人大條」とすべきであろう（p.218）。」としている。

９　ハリストス教と宮城縣

さて，仙台藩では，先に述べた仙台藩額兵隊長星恂太郎に従って箱館に渡った藩士も二百数十名を超えた。箱館戦争の前後に，箱館でロシア正教（ハリストス教会[14]）のニコライの思想的・宗教的影響を受けた藩士も多かった。中でも，先に述べた金成善左衛門や新井常之進（奥邃）等がニコライに心服したこともあり，箱館戦争後は，仙台が（東京に拠点が移るまで）日本のハリストス教会の布教の中心となった。明治5（1872）年2月13日，宮城県当局（明治4年7月の廃藩置県により「仙臺藩」から「仙臺縣」を経て，明治5年1月，「宮城縣」となる。県域は，現在とは異なる。）は，耶蘇教が広まり集会も度々開かれるのは好ましくないとして，高知県士族澤邊数馬や宮城県下の多数のハリスト教徒（士族）の拘束・逮捕に踏み切ったのである。太政官定書「切支丹邪宗門之儀堅く御制禁」の高札が外され，布教が黙認される1年までのことだった（逸見（1984），p.154）。

これらの中には，第7節の冒頭で述べた「岩淵英喜　41歳」や，「富田一之進　21歳（富田鐵之助の甥「小五郎」の子：長兄の孫）」の名も見られるのである。『明治五年　高知県士族沢辺数馬外数名　宮城県下ニ於テ耶蘇教講談一件』（宮城県図書館蔵：複写版）には，宮城県から「正院（従来の太政官）」に提出され，外務省に回された史料が所収されている。この中の第2号として，

「正院ヨリ宮城縣士族耶蘇教一件書類別冊廻送ノ来翰

附属　　宮城縣ヨリ耶蘇宗徒厫刑振ノ具状書」

がある（この事件の根幹に関わる部分については，『宮城縣史　12　学問・宗教』，pp.622-624に採録されている）。これを丁寧に精査していくと

「宮城縣貫属士族　戸長　　岩渕英喜　　壬申四十四歳」

「同　旧士族小太郎嫡子　　冨田一之進　　壬申二十一歳」

の氏名が出てくる。「岩淵（渕）英喜」の拘束理由は，澤邊数馬の人名簿に記載されていたこと

14）「ハリストス教」の名称は，「イイスス・ハリストス（イエス・キリストの意）」に因む。日本ハリストス正教会の主教区は，東京大主教区，東日本主教区（仙台市），西日本主教区（京都市）となっている。日本ハリストス正教会の本部は，東京復活大聖堂（ニコライ堂）にある。

であったが，事情聴取の結果，ハリストス教信者ではなく，ロシア学を学びに一度だけ参加した者と見做され，「注意」処分となっている（ただし，逸見（1984）では，ハリストス教の講究会が，川内追廻旧御厩脇の岩淵英喜邸などでも順繰りに開かれたとしている（p.166））。また，「富（冨）田一之進」については，澤邊数馬の下でロシア学を究めるために，講席にも出席していることを問われ，2月20日に「親類預」となっている。

この後の展開を，逸見（1984）と鈴江（2000）によって整理すれば，次のようになる。外務省にとって仙台の事件は，条約改正交渉への波及が憂慮されるものであったことに加え，3月に箱館のロシア領事館附属教会に在住する（宮城県貫属士族）の津田徳之進ほか1名が逮捕され，ロシアの領事権の侵害（外交特権の侵害）が問題されることにまで発展していたのである。こうしたこともあって「岩倉使節団」を率いて渡米中の岩倉具視にも，大原重見によって報告（5月15日付の書簡）がなされていたのである。富田鐵之助は，まさにこの時，明治5（1872）年2月2日，岩倉具視からニューヨーク在留領事心得に任じられていたのである。

この件について，『仙台ハリストス教会史』は，「澤邊らの捕縛はすぐに東京の聖ニコライに知らされ，救済の策がはかられ，外務省や朝野の名士に赦免を働きかけた（p.31）。」と記している。さらに，「旧仙台藩士黒川剛（大童信太夫）はこのような蛮行は国の恥辱であると太政官顧問フルベッキに訴えて大隈重信に忠告し，また小野は副島種臣を動かした。宮城県参事塩谷良翰によって入獄者が次々に赦免され・・・最終的には，5月28日，澤邊，高屋，笹川たちが出獄して事件は終了した（p.32）」のである。これについては，『宮城縣史　12　学問・宗教』にも，同じ趣旨の記載がある。なお，引用文の中の副島種臣のこの時の役職は，「外務卿」である。

10　『仙臺戊辰史』

仙台における戊辰戦争の史料としては，『仙臺戊辰史』と『仙臺藩戊辰史』の2つがよく知られているが，ここでは，『仙臺戊辰史』（明治44 (1911) 年初版）を通して，戊辰から40年を超える年月を経た富田鐵之助の心境に触れたい。

この著は，「題字（旧仙臺藩主　伊達宗基）」「仙臺戊辰史序（大槻文彦）」，「仙臺戊辰史引（鐵軒　友部伸）」，「此の書の成りし次第（藤原相之助）」，「文情極めて歐陽公に似て・・（處士　鐵軒識）」と続き，「目次」の後に，藤原相之助による「本文」という構成となっている。

「富田鐵之助」研究は，前にも述べたとおり，吉野（1974）の研究に尽きるが，『仙臺戊辰史』のこの箇所については，まったく言及がないのである[15)]。

「仙臺戊辰史引」は，大槻文彦による文語体の「仙臺戊辰史序」の次のページから，何の説明

15）　例えば，吉野（1974）は，富田鐵之助が，『東藩史稿』（作並清亮（編），大正4年）の序文（「東藩史稿序」）を漢文で書いたことを紹介し，その全文を再載している（pp.338-339）。これを確認すると，「東藩史稿序」ではなく，「叙」であった。これに続いて，次のページから漢文で書かれた大槻文彦の「東藩史稿序」が始まっている。
　吉野（1974）には，『仙臺藩戊辰史』を参照したとの記載（p.12）はあるが，『仙臺戊辰史』についての記載は見当らない。

もなく，突然，始まる。「鐵軒」を知らない人ならば，近代的な国語辞典「言海」を編纂した「大槻文彦」の序の続きと間違われかねない程の漢文調の名文であるが，「鐵軒」は，「富田鐵之助」の「号」である（吉野（1974），p.72）。この「引」は，

「仙臺戊辰史引　　鐵　軒　　友 部 伸

勝則官軍敗則賊。臣民敢背天皇勅。西風吹破白川關。

河北諸城降旛白。・・・・・」

で始まり，著者（藤原相之助）の執筆の苦しみ・辛さに想いを馳せ，力作（1000ページを越える大著）を称えた後に，

「君不見西藩威力太猖獗。肆然當路擅輿奪。・・・・

若讀此書膽應裂。宛似百鬼夜行時。忽見東天

太陽出」

と結んでいる。

これに対して，「文情極めて歐陽公に似て」は，著者の「此の書の成りし次第」の後に（同じページに記載されたもので，縦波線で筆者が区分されている），和文調で書かれた『仙臺戊辰史』の読後の感想と賛美の名文である。すなわち，

「文情極めて歐陽公に似て・・・讀み來り讀み去るの間に涙の衿を沾すを覺えす・・・

・・・・敬服の餘り蕪言を述へて一粲に供す

辛亥春日落花滿地の處に於て　　處　士　　鐵　軒　識 」

である。

11　むすび

「第2節」で述べた事情によって，まったくの専門外の歴史ものにチャレンジすることになった。本稿の史料調査・執筆には4か月ほどの期間があったが，学内の理事長特別補佐や学外の日本地域学会財務担当常任理事等の業務に追われ，実質的な調査・執筆の期間は，実日数で1月ほどに過ぎない。従って，史料の調査不足・解読不足・誤読等の可能性がある。本稿を読まれた方で，お気づき点があれば，ご指摘いただければ幸いである。

ある賢者（青山学院大学太田浩名誉教授）は，論文には「新奇性（新規性と奇抜性（人の関心を引くこと））」が不可欠だという。本稿は，題名が示すように，「海舟日記」から富田鐵之助を見たものである。日本史の大きな流れから見れば瑣末のことではあるが，人物史的研究から見れば（郷土誌的面ではあるが），いくつかの「新しいもの」を探し出し紹介した。

本稿の調査・執筆を通じて，「人物史の研究は，長年の研究蓄積があり奥行きも深いが（いわば「縦」方向への深化であるが），互いに同時代の著名な隣人についての研究を遮断し，研究に敷衍しない傾向」があるように感じた。本稿は，同時代の著名な隣人を繋ぐ役目も幾分かは果たしたと思う。「追懐に耽けると，連想は連想を生みて，盡きる處を知らない。要するに人生は不思議なる因縁によって結びつけられ，織り出されてゐるやうなものである（内ヶ崎（1934），

p.227)。」である。同時代の著名人を「横」に繋ぐことによっても，新しい視点も生まれるのである。

本稿は，富田の再渡米までとその周辺事情までの期間を取り扱っているが，「海舟日記」は，明治31（1898）年12月26日まで記載されているので，これ以後のほぼ30年分については，機会を改めて発表したい。

参考文献

＜ 論文・著書等（著者名（発表年）の形式で引用のもの＞

原勲・高橋秀悦，「地域経済分析」（『地域科学50年の歩みと展望』，日本地域学会（編），日本地域学会，2012年，pp.181-212に所収）。

播本秀史，『新井奥邃の人と思想』，大明堂，1996年。

逸見英夫，「一條十二郎と大條清助」，『福澤手帖』106，2000年9月，pp.23-27。

逸見英夫，「大童信太夫宛の福澤書簡と計算書」，『福澤手帖』46，1985年9月，pp.1-5。

逸見英夫，「宮城県下耶蘇教講説事件」，（『宮城の研究　6　近代篇』，渡辺信夫（編），清文堂，1984年，pp.151-186　に所収）。

本田勇（編著），『史料仙台伊達氏家臣団事典』，丸善仙台出版センター，2003年。

磯田道史，『無私の日本人』，文藝春秋，2012年。

和泉敬子，「吉野作造と『六号雑誌』」，『吉野作造記念館　吉野作造研究』，2008年，pp.12-27。

河北展生，『「福翁自傳」の研究　注釈編』，慶應義塾大学出版会，2006年。

片平六左，『仙台額兵隊記』，（私家本），1979年。

大野彰，「アメリカ市場で日本産生糸が躍進した理由について」，『京都学園大学経済学部論集』19巻2号，2010年，pp.1-55。

小野寺宏，『内ケ崎作三郎の足跡をたどる』，（私家本），2007年。

大島英介，『大槻磐渓の世界 ― 昨夢詩情のこころ』，宝文堂，2004年。

大島清，『高橋是清』，中央公論（中公新書），1969年。

宮城建人，「郷土が生んだ日銀総裁　富田鐵之助伝」，『七十七ビジネス情報』第30号，2005年夏季号，pp.14-19。

宮城建人，「江戸・東京の中の仙台」，『七十七ビジネス情報』第33号，2006年春季号，pp.12-18。

坂田啓（編），『私本　仙台藩士事典　（増訂版）』，（私家本），2001年。

佐志傳，『「福翁自傳」の研究　本文編』，慶應義塾大学出版会，2006年。

Smethurst, R.J., *TAKAHASHI KOREKIYO, JAPAN'S KEYNES*, Harvard University Asia Center, 2007（リチャード・J・スメサート，鎮目雅人・早川大介・大貫麻里（訳），『高橋是清　日本のケインズ』，東洋経済新報社，2010年）。

鈴江英一，「函館・仙台洋教事件における“寛典の処置“と禁教政策への影響」，『史学』第69巻第2号，2000

年，pp.1(169)-26(194)。
高橋秀悦，「域際収支からみた地域経済の特性」，『地域学研究』第23巻第1号，1992年，pp.155-168。
高橋秀悦，「域際収支の構造」，『東北学院大学論集　経済学』第125号，1994年3月，pp.281-311。
武田泰，「富田鉄之助素描」，『松の実』（宮城県第二女子高等学校）第21号，1972年，pp.62-113。
田中生夫，「紹介　吉野俊彦「忘れられた元日銀総裁―富田鉄之助伝」」，『岡山大学経済学会雑誌』第1巻3･4号，1970年3月，pp.155-162。
筒井正夫，「富士紡績に株式会社設立に至る企業家ネットワークの形成」，『彦根論叢』，No.384，2010年夏号，pp.44-58。
内ケ崎作三郎，「緑陰閑話」，『文藝春秋』（昭和9年8月号），1934年，pp.223-227。
鵜飼幸子，「大槻家の人々」（『宮城の研究　5　近世篇Ⅲ』，渡辺信夫（編），清文堂，1983年，pp.237-282に所収）。
吉田満，『戦艦大和ノ最期』，講談社（文芸文庫），1994年，（初出は，『戦艦大和の最期』。創元社，1952年）。
吉野俊彦，『我が國の金融制度と金融政策』，至誠堂，1956年。
吉野俊彦，『忘れられた元日銀總裁―富田鐵之助傳―』，東洋経済新報社，1974年。
吉野俊彦，「解説」（『地球人ライブラリー　高橋是清伝』，小学館，1997年，pp.265-272に所収）。

＜ 全集・史料等（『全集名』の形式で引用のもの＞
『福澤手帖』105，福沢諭吉協会（編），福沢諭吉協会，2000年6月。
『福澤手帖』106，福沢諭吉協会（編），福沢諭吉協会，2000年9月。
『福澤諭吉書簡集　第1巻』，慶應義塾，岩波書店，2001年。
『福澤諭吉全集　第7巻』，慶應義塾，岩波書店，1959年。
『福澤諭吉全集　第17巻』，慶應義塾，岩波書店，1961年。
『海舟全集　第9巻』勝安房（海舟全集刊行会（編）），改造社，1928（昭和3）年，（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。
『海舟全集　第10巻』，勝安房（海舟全集刊行会（編）），改造社，1929（昭和4）年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。
『勝海舟関係資料　海舟日記　（一）～（五）』，東京都江戸東京博物館都市歴史研究室（編），東京都･(財)東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館，2002～2011年。
『勝海舟全集　第18巻～第21巻　海舟日記Ⅰ～海舟日記Ⅳほか』，勝部真長･松本三之助･大口勇次郎（編），勁草書房，1968～1972年。
『勝海舟全集　1　幕末日記』，勝海舟全集刊行会，講談社，1976年。
『勝海舟全集　2　書簡と建言』，勝海舟全集刊行会，講談社，1982年。
『勝海舟全集　22　秘録と随想』，勝海舟全集刊行会，講談社，1983年。
『勝海舟全集　別巻　来簡と資料』，勝海舟全集刊行会，講談社，1994年。

『クララの明治日記　下』，クララ・ホイットニー，一又民子（訳），講談社，1976年。
『明治五年　高知県士族沢辺数馬外数名　宮城県下ニ於テ耶蘇教講談一件』，（宮城県図書館蔵：複写版）。
『明治維新人名辞典』，日本歴史学会（編），吉川弘文館，1981年。
『宮城県百科事典』，河北新報社（編），河北新報社，1982年。
『宮城縣黒川郡誌』，黒川郡教育會，1924（大正13）年，（復刻版は，『黒川郡誌』，名著出版，1972年）。
『宮城県姓氏家系大辞典』，宮城県姓氏家系大辞典編纂委員会，角川書店，1994年。
『宮城縣史　2　近世史』，宮城縣史編纂委員会，宮城縣史刊行会，1966年。
『宮城縣史　12　学問・宗教』，宮城縣史編纂委員会，宮城縣史刊行会，1961年。
『森有禮全集　第2巻』，大久保利謙（編），宣文堂書店，1972年。
『日本銀行百年史　第1巻』，日本銀行百年史編纂委員会，日本銀行，1982年。
『仙臺戊辰史』，藤原相之助，荒井活版製造所，1911（明治44）年。
『仙臺藩戊辰殉難小史』，仙臺藩戊辰殉難者五十年祭弔祭會，早川活版所，1917（大正6）年。
『仙臺藩戊辰史』，下飯坂秀治（編），蝸牛堂，1902（明治35）年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。
『仙台ハリストス教会史』，教会史編纂委員会（編），仙台ハリストス教会，2004年。
『仙臺先哲偉人錄』，仙臺市教育會，1938（昭和13）年。
『新訂　福翁自伝』，福沢諭吉（富田正文校訂），岩波書店（岩波文庫），1978年。
『高橋是清傳』，麻生大作（編），高橋是清傳刊行會，1929（昭和4）年。
『高橋是清自傳』，高橋是清，千倉書房，1936（昭和11）年。
『東藩史稿』，作並清亮（編），渡邊弘（発行），1915（大正4）年。
『東北学院百年史』，東北学院百年史編集委員会，学校法人東北学院，1989年。
『東遊雑記』，古川古松軒，平凡社（東洋文庫27），1964年。
『要説　宮城の郷土誌（続）』，仙台市民図書館（編），今野印刷，1992年，（仙台市民図書館デジタル版）。

なお，『仙臺戊辰史』の復刻版としては，柏書房版 (1968年)，『仙台戊辰史　1～3』東京大学出版会版（1981～1983年）及び マツノ書店版（2005年）があるが，基本的には，1911（明治44）年の初版（宮城県図書館蔵）を参照した。